

「ジローナの〈天地創造の刺繍布〉について—制作地・制作年・用途をめぐって—」

金沢 百枝(國學院大学・日大芸術学部非常勤講師)

現在、ジローナ大聖堂宝物館に所蔵されている〈天地創造の刺繍布〉は、中世ヨーロッパの曼荼羅ともいえるロマネスク期の逸品である。文書記録がいったい残っていないことに加えて、比較対象となるような現存作例が少ないことから、ジローナの刺繍布の制作地と制作年代の確定は困難を極めてきた。銘文の字体がジローナ大聖堂の写字室のものと似ていることから、1050年から1100年頃カタルーニャで制作されたという説がとられてきたが、同時代の写本挿絵や壁画などと様式的な類似性はなく、研究者の間でも一致した見解がないのが現状である。そこで本発表では、おもに図像学的な分析からジローナの刺繍布の制作地と制作年代、及び用途について仮説を提示したい。

第一部:制作地と制作年代—これまでの研究では、ジローナの刺繍布の図像源は北イタリア経由で移入されたビザンティン美術にあるとされてきた。しかし、中央のキリスト像に着目して創世記図像を再考してみると、ジローナの刺繍布をビザンティンの図像伝統と結びつけるのは早計であることがわかる。中央の創造主は円形枠内で祝福のポーズをとる無髯のパンクラトールだが、これまで比較されてきた図像群にはジローナの刺繍布のような創造主が描かれた作例を見出すことはできない。一方、今まで比較対象ではなかった「ローマ型創世記図像群」をみると、そのすべてに円形枠内の無髯の創造主、パンクラトール型の創造主が表わされていることがわかった。創造主両脇の天使の表現、神の霊の表現、エヴァの創造の形式など、その他の表現にも類似が認められた。以上はジローナの刺繍布の創世記図像がローマ起源である可能性を強く示唆している。

ここでいうローマ型創世記図像とは、初期キリスト教時代に描かれた旧サン・ピエトロ大聖堂の壁画由来の図像群である。ローマ周辺の数多くの聖堂身廊部の壁画や、11世紀後半にローマで制作されたイタリア大型聖書の写本挿絵などである。11世紀後半から12世紀はじめにかけて制作されたイタリア大型聖書は「グレゴリウス改革」の旗印としてヨーロッパ各地に贈られたという。ジローナの刺繍布の創世記図像は、ローマ型創世記図像と図像学的に密接な関係にあることから、制作年代はローマ型創世記図像の模写が盛んになった1080年代以降に絞られてくる。「グレゴリウス改革」がカタルーニャに公式に導入されたのは、1078年のジローナ教会会議においてだが、特に1080年代以降、カタルーニャと教皇庁はそれまででない親密さを享受していた。教皇庁は双子のバルセロナ伯の勢力争いを調停しようと努めるばかりでなく、双子の一方であるラモン・バランゲー二世と南イタリアのノルマン公の娘との縁談をまとめた。さらに、双子の兄弟ラモン・バランゲー二世の暗殺を疑われたために脆弱な政治基盤しか築けないバランゲー・ラモン二世、そしてタラゴナ大司教座復興の野望をもつピック司教は、ともに強い後ろ盾としてローマを必要とし、対イスラム政策を強化していた当時の教皇庁の思惑と重なってローマとの距離を縮めていたという。ピック司教がローマを訪れた1089年はまさにローマ型創世記図像がローマ周辺で盛んに描かれた時期と重なる。以上から、1050-1100年と50年間の開きを持っていた制作年代を、およそ1090年代以降と絞り込むことができた。制作地については、カタルーニャの刺繍作品と、刺繍技法や様式が類似していることから、ジローナの刺繍布の刺繍作業自体はカタルーニャで行われた可能性が高いと推察される。

第二部:用途—用途については復活祭に先立つ聖週間の典礼で使用された可能性を提示した。つまり、ローマ典礼において創世記を読誦するのが復活徹夜祭のみであること、同時代の創世記注解書に復活徹夜祭で行われる洗礼の秘儀に関する記述が多く見られること、復活徹夜祭の典礼で使用された『エクスルテット・ロールズ』と呼ばれる写本挿絵と図像学的類似性がみられることから、刺繍布が聖土曜日に行われる復活徹夜祭の典礼と密接な関わりがあると結論づけたのである。一方、下縁部には、コンスタンティヌス大帝の母后聖ヘレナによる聖十字架発見譚の描写がある。なぜ聖十字架伝が天地創造図とともに描かれているのか、聖十字架伝が記されているコンテキストの分析によって二主題の組み合わせの意味について考察した。聖十字架伝が含まれる現存ラテン語写本を網羅的に調べたところ、多くは聖人伝だったが、なかには創世記注解や復活節の典礼と関係がある写本もあった。実際、聖週間の典礼を紐解いてみると、聖金曜日の典礼では「聖十字架の称揚」が重要な位置を占めており、聖十字架礼讃の歌が一年のうち最も多く歌われていることがわかる。ロマネスク期、ジローナ大聖堂には聖十字架に捧げられた祭壇が存在し、その隣室には洗礼槽が置かれていたという記録もある。つまり、ジローナの刺繍布を、聖週間の典礼で使用された装飾用の壁布だと仮定することによって、聖十字架発見場面と天地創造場面の組み合わせを、統一的に解釈することができるのである。

質疑応答—①三浦清美氏から、ローマ型図像では描かれていない循環的な構図に刺繍布の特殊性があるのではないかとというきわめて的確なご指摘、をいただき、十二世紀以降円環構図が増加するという拙論の概略を説明した。②渡辺節夫氏から提示された、刺繍布に描かれた「光と闇の天使」に関連して、光と闇、善と悪の二元論について当時どのような神学的解釈がなされていたのか、③北村直昭氏からの、そもそもなぜ刺繍作品にしたのか、④成川岳大氏からの、ウルバヌス二世よりも対立教皇であるクレメンス三世の方がローマに影響力を持っていたのではないかと、というご質問・ご指摘には強く示唆を受けたが、十分に答えられたとは言い難く、今後の課題としたい。その他、甚野尚志氏、小野賢一氏、北田葉子氏、渡辺亜希子氏、風間康子氏から有益なコメント・助言をいただいた。